

2020 Beyond Invisible Borders  
kyodo 20\_30 Archive  
Group 01:

記号化  
／  
共感

私たちには、お互いに理解するために、あらゆる情報が混在し入れ組む社会の中で、特定のものを取り上げ、意味を見出し、言語という記号をつけ、意思の疎通を図っているのではないかと思います。ものに輪郭を与える、意味を与えることは、その範囲を限定させます。

国境は世界そのものにとっては無の意味です。絵画もダンスも映画も、意味です。絵を展示する環境、舞台という空間と時間、そして映像のフレームの中は脳内に構成されています。本来の世界はいつもその外にあります。私たちは世界の本来の姿を見るために、作品を作ります。意味はフレームの外、世界はフレームの中に。しかし、作品を作ること自体が世界にフレームをつけて、意味を見出す行為になっています。世界は無限に接近できるけど、永遠に到達できないところです。私たちの作品作りはいつまでも、意味と世界の狭間で繰り返される格闘と言えるかもしれません。

Team:

# 記号化／共感

Member:

**沙羅リカ**

**富高有紗**

**桐葉恵**

**小田部恵流川**

**蔣雯**

## プロフィール



蔣雯（ジャン ウェン）

俳優、映像作家。北京電影学院修士課程卒業。東京藝術大学大学院映像研究科博士課程に在籍。2018年に映画における意味から脱却する身体を研究するため、「詩的身体研究所」を設立し、映画創作活動を始めました。2020年、プロジェクト「東京で国（境）をこえる」にコラボレーターとして参加し、「国境」を含めるあらゆる「記号化」と「意味づけ」の境をこえようとするコンセプトで作品制作をしています。



富高有紗

幼少期の5年半をアメリカで、思春期の7年間を中国で生活。学生時代は国際政治学を専攻しながら舞蹈の単独公演を企画・運営、新宿ゴールデン街でのアルバイト、学生映画の制作・出演、スウェーデン出身の監督による女性用ポルノのドキュメンタリーの通訳、ドイツで民主主義とデモンストレーションスピーチなどを経験。現在は日中仕事をしつつ、社会とアートとのかかわり方（直近は演劇出演・制作助手・鑑賞など）を模索しています。



沙羅リカ

絵や言葉を手段、空間を媒介に、人が「自分」や「他者」や「世界」とひっそり繋がるようなちょっとした場を作る試みをしています。

<プロジェクトについて>

コントロールできず、言葉にする思考も追いつかない、感覚のみぞ知る領域に身を委ねたい。「意味を求めるもの」「意味が存在しないもの」に出会いたい。理解しようと、伝えようと、何かに当てはめようすると、途端に壊れてしまうものたち。記号化しつづける私たち。創造と破壊を同時にそして繰り返している。私たちに発見される前の、記号や意味の境をこえた「何か」に触れてみたいと思っています。

# 意味の境を越える身体へ —ショットムービー制作プラン

制作代表：蔣斐

## コンセプト

ポストモダン時代の映画は意味を伝える記号ではなく、他者と共に存する世界そのものであるという発想から、身体、演出、観客とカメラの間から自動生成していく、生き物のような映画を作りたいです。

## 実施法

制作チームは俳優組、制作組と観客組からなります。簡単なプロットに基づき、即興、振り付けなどの演出法で俳優の身体を意味のエージェントの役割から解放させます。俳優は「今」の身体感覚に基づく演技創作法で、身体を用いて物語の進展に影響を及ぼします。監督がない脱中心化の制作法に基づいて、制作組は出演者の身体から生成した物語を記録、編集し、次の展開を観客組と共に構想、演出します。

## 制作チーム

俳優組：富高有紗、綾田将一、aqiLa、桐葉恵、川渕優子、廣木真琴

制作組：矢野靖人、小原誠、沙羅リカ、野村プリシラさゆり、横田雄平、友杉陽子、蔣斐

観客組：長谷川祐輔、吉村優一

制作スケジュール

撮影期間は3月から一週間1回、2～3ヶ月程度で（映画の生成具合によります）、ポストプロダクションは1ヶ月程度の予定です。

## ショットムービーまでの発想経緯

### STEP1 「Zoom で共同時間 20\_30」 ワークショップ

#### 1. コンセプト

コロナの時期、Zoom を現実のコミュニケーションの代用品としてたくさん使っているうちに、少し疲れました。代用品は本物に勝てないのは当たり前のことです。今回のワークショップは、Zoom を何かの代用品ではなく、Zoom でしか見えない世界を見てみたいという発想で考えました。

#### 2. 内容

参加者は事前に決まった時間になったら、Zoom 会議室に入り、ビデオと音声がオンの状態で、20～30分オンラインを継続します。その時間をホストによってレコーディングします。この間、参加者は何をしても大丈夫です。ただ一つの制限、Zoom を使っているタブレットは参加者と同じ空間に置かなければなりません。参加者が Zoom のカメラに映らなくても大丈夫、カメラが動いても動かなくてもオッケーです。

例えば、参加者はこんなことができます。

普段通りに生活する。

カメラの前で何かして見せる。

他の参加者に声をかける。

他の参加者がいる時空を見る。

参加者以外の人と話をする。などなど ...

#### 3. 感想

オンラインの世界はほぼ意思疎通に使われてきたが、このワークショップを通して、オンラインで意味以外の混沌たる身体と出会ったように感じました。特に、カメラの機械の目を使ったため、肉眼で実現できない複数で無選別な視点を得ることによって、身体の像ですけど、肉眼で見られない身体の潜在性が映っています。映画も同じく機械の目を持っていますが、「Zoom で共同時間 20\_30」で見た世界は監督とカメラマンがいないという意味で、オンラインの世界は映画より脱中心の一面向持っていて、もっとリアルの世界に近づける可能性を持っています。このワークショップで気づいた複数で無選別な視点はショットムービーの脱中心化の制作法の発想元になりました。

## STEP2 自撮り日記

### 1. コンセプト

リモート生活で加速した意味中心の社会になっていくこの時期、自撮り日記を撮ってプロジェクト内で共有したことによって、オンラインでも意味以外の世界と身体が出会う可能性を探りました。

### 2. 内容

日記①：クローズアップ、音と画の対位法を用いて、意味を持つ前の物質としての世界を映し出そうとしました。



日記②：映像の中の世界と身体に更にフレームをつけることによって、「現在」ではない映像身体の本質を提示し、映像における意味の自動生成を検証しました。



日記③：身体と音声がシンクロしないこととスローーションの異化効果によって、身体と意味にそれぞれ独立性を持たせ、身体の潜在的な一面を表現しました。



### 3. 感想

自撮り日記は映像を用いて意味の境を越える身体にアプローチする可能性を探索し、ショットムービーに使われる演出法の演習になっています。

## STEP3 分科会

分科会で記号化・共感を巡って、映像、絵画と身体表現について色々と話し合いました。意思疎通(共感)のための記号化、記号としての絵画、記号としてのダンスとか。記号化された共感は仮象ではないかと疑問を持ちながら、意味の向こう側にある身体と世界への関心を強めました。そこで、映像、絵画、身体表現の三つのメディアを使って、未知の身体へ会いに行きたい作品を作ろうとチームメンバーの意志が一致し、「絵画の身体」、「ダンスの身体」、「ショットムービー——意味の境を越える身体へ」の三つの作品プランを立てました。分科会の討論はショットムービーのコンセプトと制作法を明確にしました。現段階、ショットムービーの進行具合はプロジェクト全員に向けて制作メンバーを募集し、チームを結成しました。制作の始まりがとても楽しみです。

# ダンスの身体

制作代表：富高有紗

## コンセプト

コロナ渦に国立歴史民俗博物館で開催された『性差（ジェンダー）の日本史』では、性（ジェンダー：ここでは男女を指す）の区別は戸籍上も政治上も古墳時代まではなかったそうです。のちの軍事的緊張を受けて徐々に、男性が政治的支配権を独占するようになり、男女の壁は広がっていったのだとか。

上記は魏志倭人伝や古事記をはじめとした当時の資料（少なくとも当時の人々が残した事実）をもとにした一説であり、同時に私にとっての希望もあります。女として東京で生きていると今でも生活の一部にあり、見て見ぬ振りができない「男女の壁」について、今一度、問いかけ、向き合い方を更新したいです。

壁を乗りこえるには、

1. 壁があることを認識すること
2. 生まれた背景を理解すること
3. 乗りこえるための棒を保持し、使用すること  
(ないしはトンカチで壁に穴をあけること)

この3つの要素が必要だと考えます。

「男女の壁」を触ることのできる銭湯。そして、リニューアル後にその「男女の壁」である浴室の男湯と女湯の壁が取り払われた快哉湯にて、そもそも男女の壁は必要なのか、男女の壁が不必要な場合（壁があることでもう一方の存在・生活に制限を与えていたのであれば）どう乗りこえたらいいのか、について一緒に考えませんか。

## 想定しているアウトプット

展示趣旨：ダンスパフォーマンスの公演と映像展示がセット

1. 「性差（ジェンダー）の壁を乗りこえる」ことをテーマとした公演（ダンス / パフォーミングアーツ）

公演場所：銭湯（できれば快哉湯）

公演日（案）：緊急事態宣言解除（2021年3月7日）以降の週末（土曜日ないしは日曜日）1日

2. 「ダンスの身体」映像

（上映中のパフォーマンスを除く、上演前、上映中の観客、上映後を撮影した映像：ステージと時間という、記号化と共感のフレームの外にいる身体を記録・鑑賞するため）

展示場所：経堂アトリエおよびオンライン

展示日：未定

※緊急事態宣言延長に伴い現在展示方法含めて検討中

## 集客

1. 銭湯での公演では、クローズドの場として女脱衣所に6名、男脱衣所に6名、計12名程度  
※映像作品の一部として使用するため、撮影可の方。コロナ渦に鑑みて人数を制限。
2. 「ダンスの身体」映像では、舞台をイメージし3面に上演前・上映中の観客・上映後の映像を投影する形を想定。

## 快哉湯について

東京台東区下谷の快哉湯は明治末期に創業、関東大震災により一度倒壊したが、昭和3年(1928年)に再建され、ほぼ当時のままの佇まいで家主様により運営されていた。2016年11月に惜しまれながら幕を閉じることとなった。

まちに親しまれてきた快哉湯を「なんとかして守り繋げたい」という思いを胸に、家主様との対話を重ねてきた株式会社ヤマムラの新たな事業として快哉湯の建物活用、運営について任せて頂くことになった。歴史ある建物であり、なおかつ木造大空間である旧銭湯を改修するには様々なハードルがあった。まちに親しまれていた外観はほぼそのままの形状で修復し、内部の大空間は内側から新しい木構造で支える等の創意工夫をして大きな改修を終えた。この建物を自社で活用・運営していくことを見据えて、設計から施工までやり遂げたことも大きな成果となった。

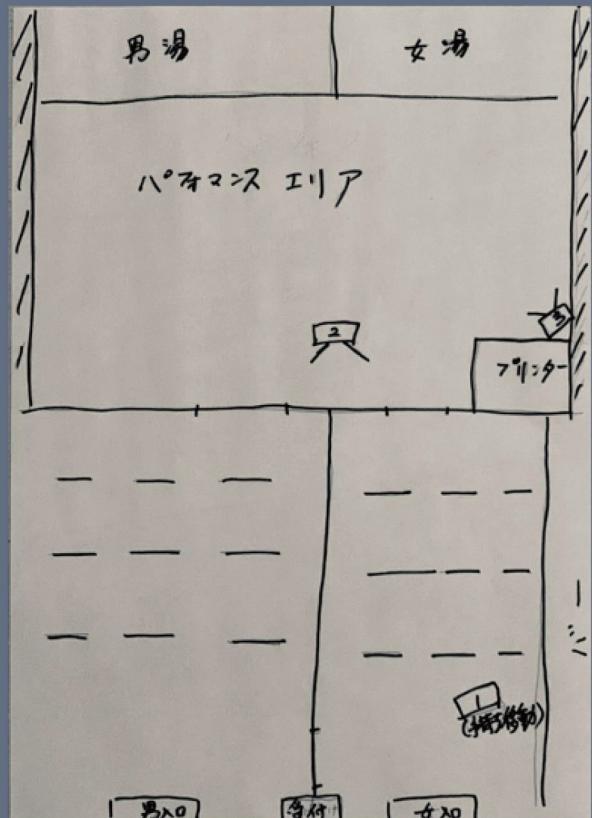
(快哉湯 HP(<https://kaisaiyu.com/about/>)より)

撮影..富高有紗



# 公演に向けての構想

会場使用イメージ



絵おこし：蔣雯

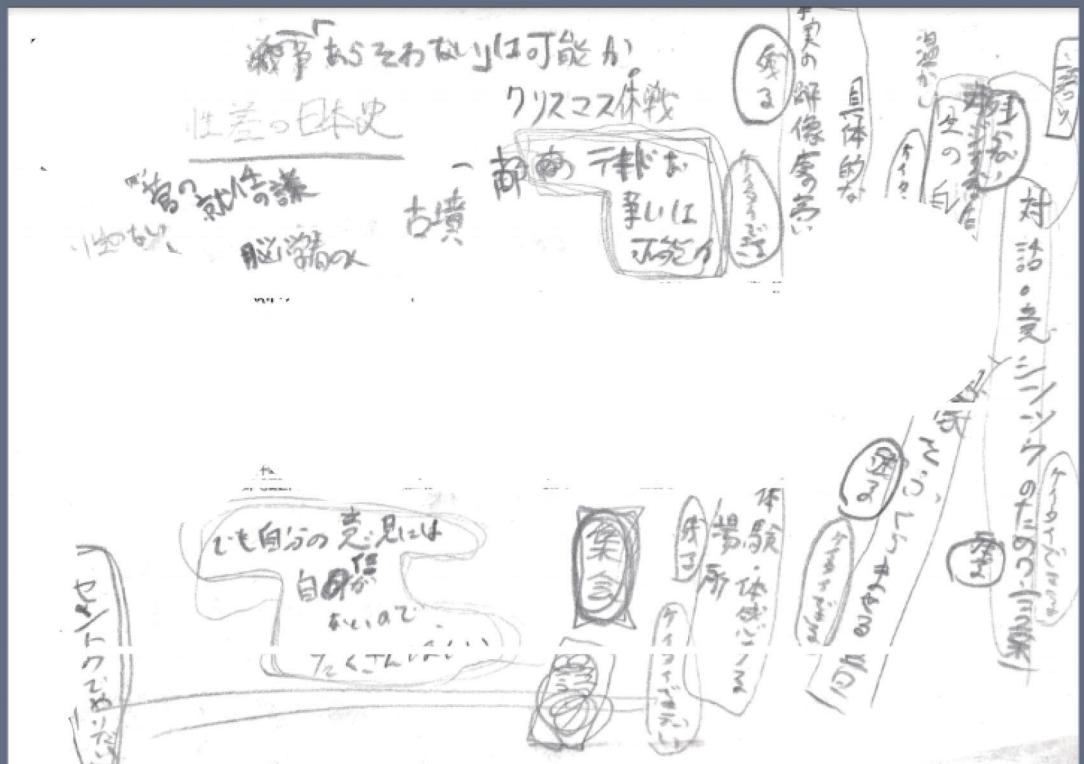
女湯入口



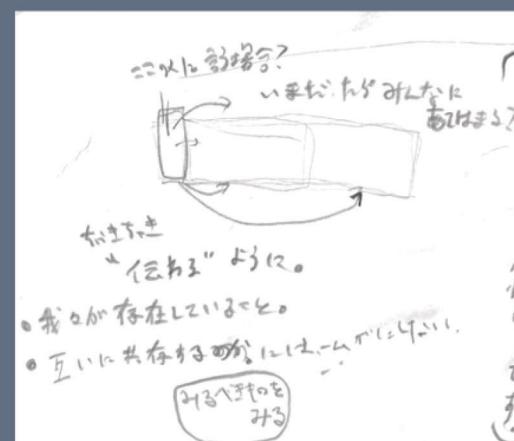
パフォーマンスエリア



撮影：富高有紗

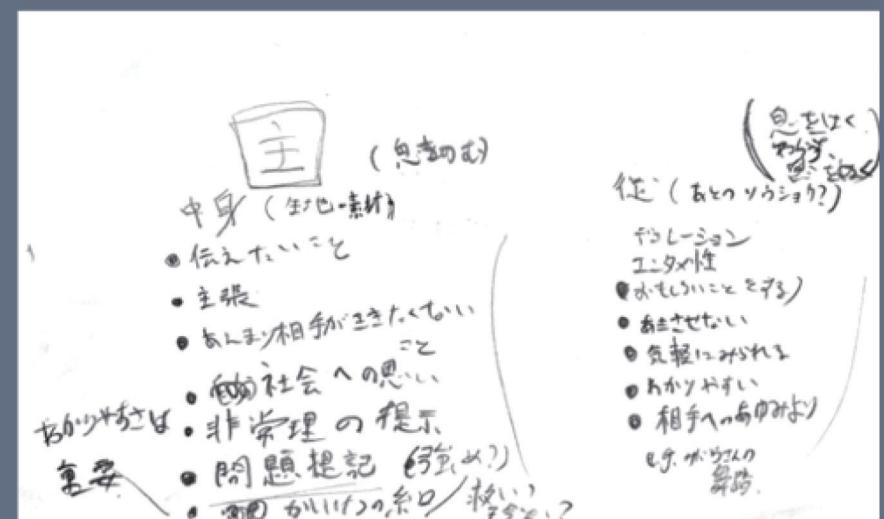


構想メモ



※普段はオフィスのため、テーブルや椅子が配置されている。

公演時はテーブルや椅子をはける想定





# 絵画の身体

制作代表：沙羅リカ

テーマ：未知の身体へ会いに行く

人物画と、それを描いている身体を映像にしたものを作成し、同時に展示し、身体へのアプローチを試みます。

本事業は「東京アートポイント計画」として実施しています。東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

In cooperation with various arts organizations and NPOs, Tokyo Artpoint Project pursues art projects with local community and citizen involvement as a way to foster an environment where everyone can be actively engaged in culture and to create and disseminate Tokyo's charm. The project is organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture.  
[www.artscouncil-tokyo.jp](http://www.artscouncil-tokyo.jp)

主催:

東京都 |

公益財団法人東京都歴史文化財団

アーツカウンシル東京 |

一般社団法人shelf

Organized by

Tokyo Metropolitan Government,

Arts Council Tokyo

(Tokyo Metropolitan Foundation  
for History and Culture),

shelf Association

発行:

公益財団法人東京都歴史文化財団

アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北

4丁目1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL 03-6256-8430

FAX 03-6256-8827

◎アーツカウンシル東京

Printed in Japan.

ISBN978-4-909894-21-2 C0070

All Rights Reserved.

文化でつながる。未来とつながる。  
THE FUTURE IS ART

**Tokyo Tokyo**  
FESTIVAL



<https://www.tokyokokkyo.tokyo>